

## 2015 年度研究会報告 日本語教師性とは何か —日本語教師研究の意義と課題

牛窪 隆太（関西学院大学日本語教育センター）

本研究は、筆者が過去に実施した、日本語教師を対象とした二つの研究事例を示し、その結果見えてきた求められる教師としてのあり方を「日本語教師性」として批判的に検討することから、「教師の自己成長」論の問題点を明らかにするものである。

研究事例 1 は、新人日本語教師を対象としたものである。教授経験 5 年目までの新人教師を対象に、教育機関における経験についてインタビュー調査を実施し、そのうち教育機関への参加において授業に葛藤を感じていると判断される教師（12 名）から得られた語りについて、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析した。その結果、新人教師たちは、授業見学を受けることによって授業改善を行う一方で、他の教師の授業を見学することはできず、養成講座で身につけた典型的な教授法を繰り返しながら、初級は大丈夫という自信を得るようになることがわかった。また、他の教師との関係性について、お互いに「フリーランス」であり、気軽に聞いてはいけなさいと考える一方で、忙しさの中で、他の教師と関係性がもてないまま、無難に割り当てをこなすという日本語教育観をもつようになっていた。

研究事例 2 は、当時の所属機関で立ち上げた現職教師の授業勉強会に参加した中堅教師たちの学びの実感について分析したものである。活動開始一年半後に実施したインタビューにおいて、教師たちは、授業勉強会に参加することで、「目の前の学生に必要な日本語を教える」のが日本語教師の仕事であるという日本語教育観の先を考えることができたと話した。授業勉強会は「あなたはだあれ」と問われる場であり、自身の教師としての姿勢やあり方について、改めて考えさせられたという。このことから、インタビューにおける発言を内容別にまとめ、発言間の連関を見ることによって、授業勉強会で「あなたはだあれ」と問われたと教師たちが発言した背景にあるものを検討した。その結果、教師たちは、教員室ではできない話し合いをする場として勉強会を位置づけており、他の教師とつながることに意味を見出していることがわかった。

これら二つの結果を踏まえるのであれば、日本語教育において主張された「教師の自己成長」論は、与えられた枠組みにおける授業改善に貢献する一方で、現状の個体主義的な教師環境そのものについては、これを肯定し維持するものになっていると考えられる。このことから、日本語教育においては、教師の関係性の不在によって、他の教師の存在が、「拘束性」を生み出すものになっており、教師の関係性が問われないまま「自己成長」が推奨されることによって、日本語教育とはそういうものであるという「暗黙の了解」が維持されている可能性を指摘した。